

1. 歯にまつわる季語

意外と無くて、「歯打」「歯固」くらいです。

歯打（はうち）：権現舞（ごんげんまい）の傍題、新年の季語。

権現舞とは、東北地方の山伏神楽で、家々をまわって悪魔払いや火伏せをする獅子舞のこと。この権現舞で獅子が歯を打ちならすことを歯打という。悪魔退散の一種のまじない。

歯固（はがため）：新年の季語。

年の初めに歯を固めると称して鏡餅（もち）や押鮎、猪の肉などを食べる風習。歯は齢（よわい）の意味で、歯固めには長寿を祝うの意も含まれている。年神に供えた鏡餅をそのまま歯固めと呼ぶところがあり、これを夏季まで保存し、6月1日に食べることもある。

< 例句 >

歯がために二人の翁喰ひにけり 鬼貫

歯固の歯一枚もなかりけり 小林一茶

歯固や年歯とも言ひ習はせり 高浜虚子

2. 歯を詠んだ句

一番有名なのは、中村草田男のこの一句ではないでしょうか。

万緑の中や吾子の歯生え初むる 中村草田男

（ばんりょくのなかやあこのははえそむる）

全ての風景が緑に覆われる中、わが子に初めての歯が生えた、という意味の俳句で、生命の喜びと成長の喜びを詠んだ一句。現代文教材に良く使われている。「万緑」は、初夏の新緑のみずみずしい緑よりも強い、真夏の深い緑。草田男のこの一句により、俳句の季語として定着した。

歯が抜けて筍堅く烏賊こはし 正岡子規

塩鯛の歯ぐきも寒し魚の店 松尾芭蕉

ほつくりぬけた歯で年とつた 種田山頭火

歯は年中存在しているので、季語（季節を感じる言葉）にはなりにくいといえるでしょう。しかし、言葉は生きていて、使う人や時代・生活と共に代わります。たとえば、花粉症などは近年、春の季語として地位を確立してきました。はぴかちゃん俳句大賞で毎年「歯」の名句・例句が量産され、そしていつか「歯」に関する新しい季語まで生まれる日が来るかもしれません。

参照：新日本大歳時記（講談社）、合本俳句歳時記（角川学芸出版）